

智惠鑑の典拠論 1

— 智囊との関聯よりみたる —

目 加 田 さ く を

万治三年季春十二日刊の智惠鑑序文において、橘軒山人辻原元

甫は

それ氣質の性より論する時は智愚の差別ひとしからすといへ共
天よりあたへ給へる本然の良知に至りては人々具足せる智惠の
鑑なきにしもあらされはたとひ愚昧に生れつきたらん人も講磨
の工夫怠らすんはなとか二たひ本然の明智に帰らざらんや方寸
のすこしき中にかくしおける鑑なれとも近くは一身をかゝやか
し遠くは天下国家をも照すへき宝なればこれをあきらかならし
めんかためにこそ稽古の力をもはけます事なるをたゞいたつら
に浮文空言のみを弄ひ侍らんは口に四庫の書を暗し胸に五車の
籍を蟠しむといふとも偏にこれ雲霧の空をなかめて日月の光を
見付さるかことくなるへしこを以て帰隱の後諸史百家の内よ
り智惠のたよりとなるへき故事共を撰ひ出し十の品をわかち諺
解してつるに智惠鑑と名付門葉のおろかなる輩にさつけ侍るは
わか鑑くもりなはいにしへの鑑をかりて磨くへしといへる心な

るへし

と述べるのみで、直接、明の馮夢龍の智囊に依拠して智惠鑑を撰
著した事情を明かにする所がなかつたのである。しかしながら、
智惠鑑が智囊に受けた影響関係は、「諸史百家の内より智惠のた
よりとなるへき故事共を撰ひ出し十の品をわかち云々」とさりげ
なく言ひ去られる底のものではないと思はれるのである。

先づ、智惠鑑と言ふ名称であるが、人間各々が内蔵する鑑——
良知——の曇りを磨くに資する故人先哲の良知——智惠の鑑——
と一見まことに独創的呼称の如く見えるが、智囊——智惠のふく
ろ、必要な時その囊中よりとり出して参考に供せられる沢山の智
惠を蔵した囊、（此の智囊自身、史記に既にみえる呼称であつて
その襲用であるが）——と殆ど同じ意味あひのものであるが、只、
日本に平安朝以来数多い〇〇鏡と称する作品にヒントを得て、「智
惠のふくろ」智囊に対し「智惠の鏡」、智惠鑑と案出命名したに
過ぎないものゝ様である。

(I) 組織上の影響

智囊は十部、二十八卷よりなり、巻頭に、総叙、次いで総目録を有し、又『各部前有総叙、毎巻前有語』、且、毎巻各目録をもつ整然たる組織の説話集である。目録は多く人名であるが、他に、寺名、又は竹簡、石仏首、仏牙といった物名、無底船、用虎用獅、合兵、船置草、夢虎、といった動作情態を意味するもの等がある。本文に入ると目録と同一の題名下に一名或は兩参名に及ぶ〇〇智にふさわしい事蹟事件が叙せられ、或る場合、評語が附加されるのである。

智恵鑑はその組織を殆どそのまゝ踏襲してゐる。即ち、巻頭、総叙ともいふべき前掲の序文をもち、全十巻——（智囊の十部に相当する）——に分れ、各巻目録をもち、次いで各巻の小序ともいふべき前書——智囊の各部の総叙に相当する——がある。次いで、一、殷の高宗民の辛苦をしり給ふ事、といふ風に、標題を立て、説話を始めるのである。只、智囊の如く十部二十八巻といふ大部のものでなく十部即十巻の小本であるから組織も小く、従つて全巻の総目録は欠いてゐるのである。

次に智恵鑑各巻の小序ともいふべき前書を仔細に見ると、智囊各部の総叙を切り綴ぎしたものに外ならず、分類上の術語の如きはそのまゝ踏襲使用してゐるのである。例示して比較してみるならば

上智部総叙（智囊）

馮子曰智無常局、以恰肖其局者為上、故愚夫或現其一得、而曉人反

失諸千慮、何則、上智無心而合、非千慮所臻也。人取小、我取大、人視近、我視遠、人動而愈紛、我靜而自正、人束手無策、我游刃有余、夫是故、難事遇之而皆易、鉅事遇之而皆細、其幹旋入于無声臭之微而其舉動出入意思思索之外、或先忤而後合、或似逆而實順、方其間、豪傑所疑、迄乎斷斷、聖人不易、嗚呼、智若此、豈非上哉、上智不可學、意者法上而得中乎、抑語云、下下人、有上上智、庶幾有觸而現焉、余条列其賢、稍分四則、曰見大、曰遠猶、曰通簡、曰迎刃而繞名之曰上智

上智部（智恵鑑）

上智は上の智也。思慮分別をまたずして自然と道理にかなふを○上智とす。こまかに論ずる時は。見大。遠猶。通簡。迎刃の四つ×の品あり。一つに見大といへるは小を捨て大にもとづくの智也。二つに遠猶といへるは近きにかゝはらずして遠きをおもんはかるの智なり。三つに通簡といへるは理に通達して。さわざまよはざるの智也。四つに迎刃といへるは誰人も手をつかぬでなし得ざる所を自由自在にさばく智也。上智はまなんで至るべきにあらずといへども。つとめはげんで。のつとりならはななどかその中智にほいたらざらめや。

右に掲げる智恵鑑の全文は、同類符号の智囊の文章の和訳乃至『諺解』であつて、何等新説の附加されたものを見ない。山人は智囊の総叙の文章をわかり易くする為に配置をかへて和文に訳し出したにすぎないのである。

智囊の各部は各々左掲の如く二卷乃至四卷に細別されてゐるが
智恵鑑にあつては智囊程整然と詳細に分類してはゐないが、各部
一卷とし、その小序において上掲の例と大同小異の方法で、智囊
における各卷分類の題目を術語的に用いて説明を施してゐるので
ある。

智 囊

上 智 部

見大卷一 遠猶卷二 通簡卷三 迎刃卷四

明 智 部

知微卷五 億中卷六 剖疑卷七 経務卷八

察 智 部

得情卷九 詰奸卷十

胆 智 部

威克卷十一 識断卷十二

捷 智 部

靈變卷十三 応卒卷十四 敏悟卷十五

術 智 部

委蛇卷十六 謬数卷十七 権奇卷十八

語 智 部

辯才卷十九 善言卷二十

兵 智 部

不戦卷二十一 制勝卷二十二 詭道卷二十三 武案卷二十四

聞 智 部

賢哲卷二十五 雄略卷二十六

雜 智 部

狡黠卷二十七 小慧卷二十八

智 恵 鑑

上 智 部 (上掲)

明 智 部

明智はあきらかなる智也。こまかに論ずる時は知微、億中、剖
疑、経務の四つの品あり一つに知微といへるは……

察 知 部

察智はあらはれかたき事を推察する智也。こまかに論ずる時は
得情、詰奸の二つの品あり一つに得情といへるは……

胆 智 部

胆智は胆のふとき所のあるの智也。こまかに論ずる時は威克、
識断の二つの品あり一つに威克といへるは……

術 智 部

術智は手だてをして利をうるの智也。こまかに論ずる時は委蛇、
謬数、権奇の三つの品あり一つに委蛇といへるは……

捷 智 部

捷智ははやき智也。こまかに論ずる時は靈變、応卒、敏悟の三
つの品あり一つに靈變といへるは……

語 智 部

語智はことばにいひ出すの智也。こまかに論ずる時は辯才、善
言の二つの品あり一つに辯才といへるは……

兵 智 部

兵智は大將兵をもちゆるの智也。こまかに論ずる時は不戦、制

諺、説道、武案の四つの品あり一つに不戦といへるは……

聞智部 聞智は女の智恵也。古語に……賢哲、雄略の二つの品あり一つに賢哲といへるは……

雑智部

雑智にはそれと定めかたく組まぜたる小智共をあつめたり。こまかに……狡黠、小慧の二つの品あり一つに狡黠といへるは……

以上を見れば明瞭である如く、組織上、智恵鑑は全く智囊に負ふものである。

(II) 依拠の態様

智恵鑑の説話数は、目錄に掲げた章段数を以て数へれば201段である。この中明白に智囊に依拠するもの約16段である。その採択数は

智恵鑑	一	上智部	14	29	……	智囊	上智部	一、二、三卷ヨリ
	二	明智部	7	28	……		明智部	五、六、七卷ヨリ
	三	察智部	13	16	……		察智部	九、十卷（明智七、五ヨリ2）ヨリ
	四	胆智部	6	9	……		胆智部	十一、十二卷（上智一、兵智二十一ヨリ2）ヨリ
	五	術智部	8	13	……		術智部	十六、十七、十八卷

（兵智二十二ヨリ1）ヨリ

六 捷智部 11 15 …… 捷智部 十三、十四、十五卷

七 語智部 2 20 …… 語智部 十九、二十卷ヨリ

八 兵智部 24 33 …… 兵智部 二十一、二十二、二十三、二十四卷（上

智二、捷智十四ヨリ

2）ヨリ

九 聞智部 13 24 …… 聞智部 二十五、二十六卷ヨリ

十 雑智部 10 14 …… 雑智部 （捷智ヨリ2）ヨリ

智恵鑑では術智と捷智とが順序が前後してゐるがこれは意識的に改めたものでなく無意識のミスであると思はれる。

右の表で分る如く、各々同類の部より大部分採択してゐるのである。

さて、愈々、説話自体、内容並にその表現において智囊は如何に智恵鑑に影響してゐるか、換言すれば智恵鑑が智囊に如何に依拠してゐるかを詳細にみたいと思ふ。便宜上、楚の莊王の故事並に李夫人の故事を素材とする説話を採び、先づ、智囊の叙述と智恵鑑の叙述を対照してみよう。（符号は凡て筆者の加へたものである）

智囊（卷一）上智部見大○楚莊王宴羣臣、命美人行酒、日暮、酒酣燭滅、有引美人衣者、美人援絕其冠綬、趣火視之、王曰、奈何顯婦人之節而辱士乎、命曰、今日与寡人飲、不絕綬者不飲、羣臣盡絕綬而火、極飲而罷、及鄭之役、有一臣常在前五合五獲首、却敵卒得勝、詢之、則夜絕綬者也』

『蓋先嘗為吳相時、蓋有從史私益侍兒、蓋知之弗泄、有人以言恐從史、從史亡、蓋親追反之、竟以侍兒賜、遇之如故、景帝時、蓋既入為太常、復使吳、吳王時謀反、欲殺蓋、以五百人圍之、蓋未覺也、會從史適為守蓋校尉司馬、乃置二百石醇醪、盡飲五百人醉臥、輒引蓋起曰、君可去矣、旦日王且斬君、蓋曰、公何為者、司馬曰、故從史盜君侍兒者也、于是蓋驚脫去、』

梁之葛周、宋之种世衡、皆用此術、克敵討叛、若張說免禍、可謂輜園之福、兀木不殺小卒之妻、亦胡虜中之杰然者也、○『葛周嘗与所寵美姬同飲、有侍卒目視姬不輟、失答周商、既自覺、懼罪、周並不言、後与唐師戰、失利、周呼此卒奮勇破敵、竟以美姬妻之、』『胡酋蘇慕思部落最強、种世衡、嘗夜与飲、出侍姬佐酒、既而世衡起入内、慕思竊与姬戲、世衡遽出掩之、慕思慚愧請罪、世衡笑曰、君欲之耶、即以遺之、由是諸部有式者、使慕思討之、無不克』

『張說有門下生盜其寵婢、欲寘之法、此生呼曰、相公豈無緩急用人時耶、何惜一婢、說奇其言、遂以賜而遣之、後查不聞、及曹姚崇之構、禍且不測、此生夜至、請以夜明簾獻九公主、為言乎玄宗、得解、』

金兀木愛一小卒之妻、殺卒而奪之、寵以專房、一日昼寢覺、忽

見此婦持利刃、欲向、驚起問之、曰、欲為夫報仇耳、木嘿然、麾使去、即日大享將士、召此婦出、謂曰、段汝則無罪、留汝則不可、任汝於諸將中、自挾所從、婦指一人、木即賜之。

智惠鑑 上智部六楚の莊王の臣美人の袖を引事

楚の莊王群臣をあつめ酒宴せられけるに美人共あまた出し酌をとらせられければ夜に在るまでさしつさゝれつしみける所に酒宴なかばの折ふしともしびふと消ければそのひまにある美人の袖を引けるに物のなさけもしらぬ美人にてや有けむ其まゝかの者のつらにむさぼりかゝりかむりの緒をひき切うちおとしはしたなくものゝしりていそぎ火をめし狼藉ものを見給へとよばゝりける所に莊王おぼしめしけるは美人の節義は奇特なれ共女にかへてさぶらひに面目うしなはせん事も本意ならずとてまず火を制し給ひて仰けるは今日君臣うちまじはり酒宴して相ともによるこびをきはむる折ふしなればたとひいさゝかの失あり共ほいなくあらはすべき事にあらずしからば座中の人々ことごとくかむりの緒をきりぬがるべし一人にてもさなき人あらばわが満足にあらずと有ければ我もくゝと残らず仰にしたがひかむりの緒をきりぬぎて後ともし火出て又もとのごとく酒宴ありし也其後鄭の国ととりあいありし時あるさぶらひ一人莊王の御さきに立五たびやりをあわせ五たびながらくびを取比類なきはたらきをなし敵をしりぞければ莊王奇特におぼしめしめかなるものぞと御たづねありけるにかの御酒宴に美人の袖をひきたりしものとかや。吳の袁盎。梁の葛周。宋の种世衡。唐の張說などはめしつかはるゝ女を恋忍ぶものあれば。

ひそかにそのものにあたへ本望を達せしめ給ふゆへ。かのもの共
いづれも無二の忠節をなし。大利を得られし也。大将たらん人女
わらんへの寵愛におぼれ。武士に思ひかへられんは本意なるべか
らず。

楚の莊王の故事の部分は、殆ど智囊のまゝ繙訳してゐるが、僅に
酒宴の場に元甫の主観による修飾——印——が加へられてゐる事、
知囊においては附加されてゐる所の袁盎、葛周、种世衡、張説等
の名をも掲げてはゐるが、各人の同様の話柄を述べる繁雑さを感じ、
類話の詳述を抄略して、一括して要旨を語るのみである事。
又更に、結びに教訓的言辭を附加してゐる事等は智惠鑑の性格を
規定する注意すべき事項であらうと思ふ。換言すれば、門下生乃
至童幼の教訓に資するといふ目的をその序に明示する本書は、中
国の故事、此の場合、智囊から興味を唆られた話柄を採ひ、殆ど
その繙訳の立場に近く、部分的に、一部抄略し、又は説話構成上
頂点と思はれる如き部分には自己の主観によつて多少の補足的創
作が附加されようとする、と言ふべき程度に過ぎない。中には記
憶に違ひによる相違かとも見うけられる所があつて、例へば、智囊
卷十三の呉有書生では塩菜を僧が厨にとりに行くのであるが智惠
鑑では盆をとりに行くとなり、智囊では室の入口で書生が窺ふに
対し、鑑では「僧のきたり座する所を」酒徳利をふりあげてたゞ
き殺すのであるが、これは元甫の創作意識による改作ではなく彼
の記憶違による無意識の改作であらうと思はれる等、仔細にみて
ゆくと、殆ど忠実な繙訳の域を出ないものゝ様である。

こゝで、中古或は中世の作と言はれる所の、一面、繙案乃至繙
訳的説話集でもある唐物語の章段中、同様の素材を扱つたものを
掲げて、智惠鑑と対照すると両者それ／＼の立場が明瞭に区別さ
れてくるのである。

唐 物 語 第二十二

昔、楚の莊王と申す人、群臣を集めて終夜あそび給ひけり。其御
傍に浅からず思ひ聞えさせ給ひつる后さぶらひ給ふを、人知れず
いかでかと思ひ奉る臣下ありけり。燈火の風に消えたりける隙に
後の御袖を取りて引きたりけるを、限なく憤深くや思しけむ。御
手をさしやりて、この男の冠の綬を取りて、「かゝる事なむ侍る。
早く火をともして、綬なからむ人をそれと知らせ給へ」と申し給ふ
をあるじ素より人を哀み情深くおはしければ、燈火消えたる程に
「これに侍る人々おの／＼綬を取りて奉るべし。その後燈火はと
もすべし」と宣はするに、この男涙もこぼれて嬉しく覺えけり。
かくて燈火あきらかなれど誰も皆綬なかりければその人と見えざ
りけり。かゝればこの人いかなるわざしてか君の情を報い奉らむ
と心の中に思へりけるにあるじ敵の国にせめられて危き程におは
しけるをこの人一人身を棄てて戦ひければ主勝たせ給ひにけり。
この事を思はずに怪しくおぼしてその故を尋ね問はせ給ふにこの
人申していはいく「我昔后に綬を取られ奉りて思ひ遣るかたなく侍
りしに誰となく紛はし給ひし事我今に忘れ侍らず」と泣く／＼申
しけり。

なさけなき言の葉ならば今までに露のいのちのかゝらまじやは

主これを聞かせ給ふにも猶人として情あるべき事にこそと思しけり。

唐物語の本段の典拠は古來韓非子、説苑と言はれてゐるが韓非子には見当らない様である。説苑のみを一応掲げて比較してみるならば

劉向の説苑 卷六 報恩

楚莊王賜羣臣酒日暮酒酣燈燭滅乃有人引美人之衣者美人援絶其冠綬告王曰今者燭滅有引妾衣者妾援得其冠綬持之趣火来上視絶綬者王曰賜人酒使醉失礼奈何欲顯婦人之節而辱士乎乃命左右曰今日与寡人飲不絶冠綬者不懼羣臣百余人皆絶去其冠綬而上火卒益懼而罷居二年晉与楚戰有一臣常在前五合五獲首却敵卒得勝之莊王恠而問曰寡人德薄又未嘗異子子何故出死不疑如是对曰臣当死往者醉失礼王隱忍不暴而誅也臣終不敢以蔭蔽之德而不顯報王也常願肝腦塗地用頸血湔敵久矣臣乃夜絶綬者也遂斥晉軍楚得以強此有陰德者必有陽報也

唐物語は説苑等の莊王説話に依拠したものと思はれるが、点線を附した部分、即ち、多く主要人物の心理に立ち入つてもの語る部分が、作者により創作附加されてゐる。殊に、「なさけなき言の葉ならば今までに露の命のかゝらましやは」と詠んだとする臣の歌、原説話には詩歌の片影をすらとゞめないにも拘らず、この様な歌を臣に詠ませて感激を深からしめようと試み、宛然歌物語の一章段、小歌物語の形態をとつて新しく形成してゐるのであつて、

文芸活動としては一步原話より進み得てゐるのである。これに比較すれば、智恵鑑の当該説話は殆ど忠実な翻譯にすぎず、かへつて、讀者への教訓の言辞を以て結ぶ、一篇の教訓譚——くもらばみがくべきよすがの智恵鑑——となつてゐるのであり、唐物語の文芸説話に対し、文芸的教訓説話とみられねばならない次第である。

次に李夫人の故事に取材した説話について比較してみよう。先づ、智囊並に唐物語の典拠たる前漢書、白香山集をあげ、(附号筆者)、日本の翻案乃至翻譯の説話二種を掲げて対照させたい。

前 漢 書 九十七 列伝

『孝武李夫人、本以倡進、初夫人兄延年、性知音、善歌舞、武帝愛之、每為新声变曲、聞者莫不感動、延年侍上起舞、歌曰、北方有佳人、絶世而独立、一顧傾人城、再顧傾人国、寧不知傾城与傾国、佳人難再得、上嘆息曰善、世豈有此人乎、平陽主因言延年有女弟、上乃召見之、実妙麗善舞、由是得幸、生一男、是為昌邑哀王、李夫人少而蚤卒、上憐閔焉、图画其形於甘泉宮、及衛思后廢後四年武帝崩、大將軍霍光緣上雅意以李夫人配食、追上尊号曰孝武皇后』、『初李夫人病篤、上自臨候之、夫人蒙被謝曰、妾久寢病、形貌毀壞、不可以見帝、願以王及兄弟為託、上曰、夫人病甚、殆將不起、一見我、屬託王及兄弟、豈不快哉、夫人曰、婦人貌不脩飾、不見君父、妾不敢以燕媚見帝、上曰、夫人弟一見我、將加賜千金、而予兄弟尊官、夫人曰、尊官在帝、不在一見、上復言欲必見之、夫人遂軼鄉歎歎而不復言、於是上不説而起、夫人姊妹隨

之曰、貴人独不可一見上、屬託兄弟邪、何為恨上如此、(夫人曰、所以不欲見帝者、乃欲以深託兄弟也、我以貌之好、得從微賤愛幸於上、)夫以色事人者、色衰而愛弛、愛弛則恩絕、上所以嬖嬖顧念我者、乃以平生容貌也、今見我毀壞、顏色非故、必畏惡吐棄我、意尙肯復追思閔錄其兄弟哉、及夫人卒、上以后礼葬焉、其後上以夫人兄李広利為式師將軍、封海西侯、延年為協律都尉、上思念李夫人不已、方士齊人少翁、言能致其神迺夜張燈燭、設帳帷、陳酒肉、而令上居他帳、遙望見好女如李夫人之貌、還幄坐而步、又不得就視、上愈益相思悲感、³⁾『為作詩曰、』是邪非邪、立而望之、偏何嫻嫻、其來遲、⁴⁾令樂府諸音家絃歌之、上又自為作賦以傷悼夫人、其辭曰、⁵⁾美連娟以脩嫵兮、命櫟絕而不長、飾新宮以延貯兮、泯不歸乎故鄉、慘鬱鬱其蕪穢兮、隱処幽而懷傷、猗興馬於山椒兮、奄脩夜之不陽、秋氣憊以淒淚兮、桂枝落而銷亡、神煢煢以遙思兮、精浮游而出置、託沈陰以埃久兮、惜蕃華之未央、念窮極之不還兮、惟幼眇之相羊、幽菱扶以俟風兮、芳雜襲以彌章、的容与以猶離兮、縹飄姚虞愈壯、燕淫衍而撫檻兮、連流視而娥揚、既激感而心逐兮、包紅顏而弗明、狎以離別兮、宵寤夢之芒芒、忽遷化而不反兮、魄放逸以飛揚、何靈魄之紛紛兮、哀裴回以躊躇、執路日以遠兮、遂荒忽而辭去、超兮西征、層兮不見、⁶⁾浸淫歛兌、寂兮無音、思若流波、但兮在心、亂曰、佳俠幽光、隕朱榮兮、嫉妬闌茸、將安程兮、方時隆盛、年天傷兮、弟子增欷、滄洙恨兮、悲愁於邑、喧不可止兮、擣不虛底、亦云已兮、嫵妍太息、嘆稚子兮、慟慟不言、倚所恃兮、仁者不耆、豈約親兮、既往不來、申以信兮、去彼昭昭、就冥冥兮、⁷⁾既下新宮、不復故庭兮、嗚呼哀哉、想魂靈兮、其後李延

年弟季坐姦亂後宮、広利降匈奴、家族滅矣」

李 夫 人 白香山集新樂府

『漢武帝初哭李夫人、夫人病時不肯別、死後留得生前恩、君恩不尽念未已、甘泉殿裏令写真、丹青画出竟何益、不言不笑愁殺人、又令方士合靈藥、玉釜煎鍊金屑焚、九華帳中夜悄悄、反魂香降夫人魂、夫人之魂在何許、香烟引到焚香処、既來何苦不須臾、縹渺悠悠揚遠滅去、去何速兮來何遲、是耶非耶兩不知、翠蛾髻鬢平生貌、不似昭陽寢疾時、魂之不来君心苦、魂之來兮君亦悲、背燈隔帳不得語』安用暫來還見遠、傷心不獨漢武帝、自古及今皆若斯、君不見穆王三日哭、重璧台前傷盛姬、又不見秦陵一掬淚、馬嵬路上念楊妃、縱令妍姿豔質化為土、此恨長在無銷期、生亦惑、死亦惑、尤物惑人忘不得、人非木石皆有情、不如不遇傾城色

唐 物 語 第十五

昔、漢の武帝李夫人はかなくなり給ひて後思ひ歎かせ給ふ事年月を経れども更におこたり給はずそのかみ病せし時行幸し給ひしかどもいかにも見え奉らざりけり帝あやしと思してこの由を問はせ給ふに「我君に慣れ仕うまつりし程露塵御氣色に違ひ奉らざりき又御志浅からねば恨を述ぶる事もなししかれども病に沈み容貌変りて後御心に背く罪あるべけれども又思ふ所なきにあらず紫の草のゆかりまで恵み給ひ哀憐を蒙る事は只君の御志の改まらざる程なりしかるを今のかたちに昔の御心変りなばはかなきあとにも愁の涙色まさらむ事を思ふに衰へたる姿いと見え奉らまうし」と聞

えさす帝これを聞かせ給ふに悲しくわりなくおぼさるたとひ夜半の烟と立ち昇るともいかでそのゆかりを懐しと思はざらむ只この世にて今一度あひ見るべきことを強ひて宣はすれども遂に聞かではかなくなりければ帝御心に恨ふかし甘泉殿のうちに昔の姿をうつして朝夕にまもり給ひけれど物云ひ笑む事なければ徒に御心のみ疲れにけり

絵にかける姿ばかりの悲しきは問へど答へぬ歎きなりけり

又亡き人の魂を反す香をたきて終夜待たせ給ふに九重の錦の帳の内かすかにて夜の燈火の影ほのかなるにやうやく小夜更けゆく程嵐すさまじく夜静なるに反魂香の験あるにやと覚え給ひけれど李夫人の容貌あるにもあらずなきにもあらず夢幻の如くまがいて束の間に消え失せぬ待つ事久しけれど還る事は烏玉の髪筋切る程ばかりなり燈火をそむけ帳をへだてても云ひ答ふる事なければなか／＼御心をくだくつまとぞなりにける

智 恵 鑑 卷九曰 漢の李夫人武帝の命にそむく事

漢の李夫人は昔にきこえたる美人なりければ武帝の寵愛いやましなりけるにふとわづらひ出し給ひ日にそひて次第におもりのみすくなふ見え給へば武帝此よし報聞まし／＼てかたじけなくもやまひの床に御幸ありて今一たび対面し給はんと勅諭なりけれども李夫人はきぬ引かつぎふし給ひてかくやみつかれたる身のおとろへけがらはしき姿なればいかでかまみえ奉るべきとて更に対面せられずやゝありていきのそより申上られしはいひがひなき身のいつとなくかたじけなき御めぐみにあづかり侍れば今生の栄花

露ばかりも思ひ残す事侍らずたゞひとつ心にかゝり侍るはおや兄弟の事共也われなくなり侍るとももしもおぼしめし忘れさせ給はずば父兄弟の人々を見すて給はず御あはれみをたれ給へかしとなく／＼かきくどかれけるにみかど仰けるはそれはいとやすきのぞみ事なれば心やすく思はるべし病中の事なればはづべきにあらずと思ひ対面ありて父兄弟の事をも直に契約あるならばいよく／＼たしかなるべしとて再三におよびてしる給へ共いつ迄も対面はかなひ奉るべからずくどき御事かなといひはなちて後はうめきさげびていらへ返事もなかりければみかどもぶけうし給ひ出給ふ所に李夫人のあねいもうとたち此よしを見まいらせにが／＼しき事に思はれ李夫人に異見し申されけるはたゞ一たびの対面にて父兄弟ながくみかどの御あはれみにあづからん事はいとねがはしき事なるになどかくふかくは辞退し給ふらんとせめられける時李夫人こたへられけるは色を以て人につかうまつるものは色おとろへて愛うすくなる事古今みなしかり只今みかどのわれに逢たくおぼしめす御事はわがそくさいなりし時のすがたを愛し給ひておぼしめし忘れ給はぬゆへ也しかるにかくやみつかれおとろへみにく／＼なりたるを見給はゞ興さめて恋をさまし給ふべしとひ一旦報應に背き奉る共此姿をみせまいらせずはれん／＼にはおぼし召出され給ふ事も有なんと思へばわがみかどにまみえ奉らざるはかへりてふかく父兄弟をたのみ奉る心なりとぞ申されけるに夫人の遠きおもんばかりいさ／＼かたがふ所なくはかなくなり給ひし後いよく／＼ふかく恋したひ給ひしゆへ一門の人々に恩寵ことにあさからざりしとぞ

智 囊 李 夫 人

李夫人病篤、上自臨候之、夫人蒙被謝曰、妾久寢病形貌毀壞、不可以見帝、願以王及兄弟為托。李生昌 哀邑王上曰、夫人病甚、殆將不起、屬托王及兄弟、豈不快哉夫人曰、婦人貌不修飾不見君父、妾不敢以燕媚見帝、上曰、夫人第一見我、將加賜千金、而予兄弟尊官、夫人曰、尊官在帝、不在一見、上復言必欲見之、夫人遂轉嚮歔歔而不復言、于是上不悅而起、夫人姊妹譏之曰、貴人獨不可一見上、屬托兄弟耶、何為恨上如此、夫以色事人者、色衰而愛弛、愛弛則恩絕、上所以嬖孽我者、以平生容貌故、今日我毀壞、必畏惡吐棄我、尙肯復追思閔錄其兄弟哉、所以不欲見帝者、乃欲以深托兄弟也、及夫人卒、上思念不已

智囊の「李夫人」は前漢書列伝の「李夫人」の項目下の記述中——(2)——当該説話の中心をなす——を採取して来たもので、夫人の言の一部——(一)——でかこむ部分——を抄略するのみで殆ど逐語採扱してきてゐる。前漢書——智囊——智恵鑑と言ふ一系列であつて、その系列は、王に対する純粹な愛情をではなく、李夫人の所謂「聞智」といつた、甚だ功利的な、兄弟に対する恩慮分別ある行動を強調し讚美し教訓してゐるのである。

しかしに唐物語第十五段をみると、前漢書とは行き方を異にし

ふべきであらう。只唐物語全篇にあつては大和物語に対応する意識から、説話中の漢詩は必ず和歌に翻譯し、又、原説話に詩を有しない場合は、作者が創作して和歌で当事者の心境を述べる歌物語の形態をとつてゐるのである。従つて單純な翻譯の域を遙に出てゐるのであり、李夫人の場合の如きも、李夫人にかゝはる一小歌物語構成上必要と認めない白詩の後半は潔く切除し去つてゐる事、白詩の『甘泉殿裏……愁殺』と『又令方士合靈藥……反魂香降夫人魂』との間に、筆者の創作になる『絵にかける姿ばかりの悲しさは問へど答へぬ歎きなりけり』の和歌を挿入させてゐる事、李夫人が病篤くして見舞つた帝に見えなかつた理由を夫人の言葉として詳細な叙述を行つてゐる事、前漢書、智囊、智恵鑑系の、功利的な姉妹の会見をすゝめる詞を抄略し、兄弟への帝の恩寵に対しても言葉を費さなかつた事——智恵鑑にあつては重要な部分となつてゐる事項である——等から、唐物語作者は、原典に依拠しながら、忠実な翻譯の域にとどまらず、積極的に独自の小歌物語を形成しようとする意欲を有してゐたと思はれるのである。しかし、智恵鑑は先行作品唐物語の行き方をとらなかつたし、——それは唐物語の存在を知らなかつたのではあるまいか——元甫のよくする所は中国の古典に涉猟して興味のある話柄を採集